

## OsloでのISOとその周辺

(財)日本塗料検査協会  
技術顧問 吉田 豊彦

ISO/TC35の第27回会議が6月5日(月)から10日(金)まで、ノルウェーのオスロで行われた。私は日本からの6名のデレゲーションの一人として、参加したので、その会議の周辺について報告したい。周辺というのは、会議のオフィシャルな報告は、私一人の主観でできるものではないし、ここに与えられたスペースではとても書けるものでもないし、読者にとっても退屈なさるだろうと思うからである。

とは言っても、会議のトピックスだけはお伝えしておきたい。私の偏見によることを十分に割引きながら、お読みください。

1) **VOC** 2日目、午前はVOCのワークショップ、午後にはそのWGについての話し合いが行われた。TC35でVOCをとりあげるのは初めてである。ワークショップではVOCに関する各国の取り組みかたが報告された。日塗工の豊田氏が日本の現状を報告し、アメリカはK.H.Fujimoto氏が、ヨーロッパについてはCEPEのMr.D.J.Wigglesworth氏が、ISO規格における現況は、BASFのDr.H.Nisslerがそれぞれ報告した。午後のWGでは今後のテーマや定義、測定法について話し合われた。次回は12月にオランダのデルフトでWGの会議を行う。

2) **WG16 (粉体塗料)** では大西氏(関西ペイント)がレーザー粒度分布に関する日本のデータを報告して、それに基づいて偏差が決められた。

3) **WG23 (物理的性質) WG24 (サンプリング)** では筒井氏(日本ペイント)が衝撃試験などについてJISとの整合についての議論をして、これからの方向づけに努力された。

4) **WG25 (環境試験)** では田中氏(A&D)が腐食試験の際、塗膜への傷のつけかたの腐食状態への影響について発表した。また、耐湿(湿潤)試験の条件についても日本がまとめることになった。

5) **WG26 (性能試験)** では劣化の評価のための図版として従来の写真に替えてCG画像を用いることを田邊氏(大日本塗料)が提案し、そのレポートや画像が大きな反響をよんだ。白亜化の新しい評価、化学発

光について田中氏が報告した。

6) **ISOの動向** セントラル・オフィスのMr.Dickyの講演では審議の促進と共に、Small is beautifulと規格の整理を強調していた。提案するとき、特に同種の規格がすでに存在するときなどは、バックデータなどの準備を十分にする必要がある。

と、言うような状態で、TC35における日本の活動も非常に活発になったし、ISOにとっても日本にとっても実効のあるものになってきた。これは一つには事務局の努力で事前にかなり詳しい資料を配布しておくことができたからである。

ノルウェーはスウェーデンと共に王国である。その王宮はオスロの中心の広々とした公園の中心になっている。別に堀や高い塀があるわけではなく、日本でいえば明治記念館をもう一回り小さくさっぱりしたような感じ、それでもきちんと衛兵が立っていて、毎日午後1時半に衛兵交替の儀式をする。今のオスロの人口は50万、(ノルウェーの全人口の1/10)434平方kmの緑濃い街にゆったりと暮らしているという感じを受けた。私たちの泊まっていたホテルから王宮も、会議の会場であるノルウェー工業標準局までも10分強、市の中心のショッピング・センターでも20分もあれば行ける広さである。街の大きさだけでなく、たくさんある美術館や博物館もルーブルや大英博物館のように一日では見きれないというような大きさではなく、ちょうど手頃といってよいだろうか、疲れてしまう程ではない、ほどよいスケールである。

しかし、ノルウェーの歴史は決して安らかなものではなかった。今から約8,000年から10,000年前に始まったノルウェーの歴史は西暦872年にハロルド1世によって統一される。800~1050年はヴァイキングの時代と言われ、又1349~1350年と1397年の二度にわたるペストの流行によって人口は半減する。当初ノルウェーはデンマークの一部とされ、コペンハーゲンが事実上の首都であった。1814年にはスウェーデンと合併、その

後1900年に独立する。

ノルウェーというと、連想されるのは、白夜、ヴァイキング、フィヨルド、サーモン、それからノーベル賞、…そのヴァイキングの博物館は、南極観測の船フラムの博物館や、ハイエルダールが太平洋をわたった船コンティキの博物館の、すぐ近くにある。

ヴァイキング時代のノルウェー人は今のノルウェー人よりも小柄だったそう。いまのノルウェーの人々は背の高い典型的な白色人種である。一説には遠くポルトガルやフランスまで行ったヴァイキングはそっちの方が住み易いので帰ってこなかったからだという話も聞いたけれど、どんなものか？ そして、街の治安のよいことも一級である。全く安心して歩くことができる街であった。

会議の会場であるNorsk Teknologistandardisering (ノルウェー工業標準局) は7階建てのがっしりしたビルである。1階のフロントをすぎて真っ直ぐに進むとさっぱりした食堂がある。ここでのランチは30クローネ (400円強) という安さでセルフサービスのキャフェテリアであった。会議室は6階、7階で、7階のほうは講堂とでもいうような感じである。ここの職員の事務所は全部個室で、広々とは言えなくても静かで快適そうに見えた。

オスロは、緯度から言えばアラスカのアンカレジ位にあたるので冬はスキーヤーには絶好のパラダイスと案内書には書いてあった。6月は最高気温17℃、最低気温12℃、しかも会期中ずっと晴天で、傘をひろげる程の雨は殆どなかった。

スキーのジャンプ台のあるHolmenkollennへは電車で30分位。箱根の登山電車のような感じで登ってゆくと、眼下のオスロの市街とフィヨルドを見下ろす展望台にでる。そこにある100年か150年になるレストランでディナー・パーティが行われた。メインディッシュはトナカイのステーキ。このパーティの席で功労者への賞が贈られた。昨年、池田承治氏、松井鮎治氏、山崎不二雄氏に贈られた賞である。今回は長年TC35のセレクトリーを勤めたMrs.Paap、今回でリタイヤするMr. Camina (イギリス、元 Paint Research Association)、今回の会議のアレンジの中心を勤めたMr. Rinvoll (ノルウェー) と会議の実務をしていたノルウェーの女性に贈られた。

会期中の一夜、Mr.Rinvollが私と田邊氏とをProf. Banckenn (TC35委員長) 夫妻、Mr. Reinmuller (DIN)、Dr. Heinrich (ドイツ)、Mr. Nielsen (ノルウェー)、と共に別荘に招いてくれた。市街を離れて未舗装の道をゆっくり進む車の前を鹿がよこぎる。コペンハーゲン行を始めオスロに出入りする船は必ずこの下を通るというフィヨルドを見下ろす岬は伯母さん、従兄弟などRinvoll 一族の土地だということであった。Rinvoll 夫妻のコテージでの楽しいときを9時過ぎに辞してホテルに帰ってもまだ夜の感じはしない。10時半すぎても日は暮れないのだ。11時過ぎて暗くなっても3時頃には明るくなる。そのかわり冬は出勤も退勤も暗いと聞いた。別の日、日本メンバーで港のレストランで食事した後、浜辺の時計台をバックに写真をとったが (その写真はまだ拝見していないが) 時計は夜の10時半なのに、断り書きをつけておかないと朝の10時半と思ってしまう位の明るさである。

先にノルウェーというと連想されるのはノーベル賞と書いたが、そのノーベル財団も街の中、ここがそうですよ、と注意してもらわないと見過ごしてしまいそうな、しかし重厚な建物である。

ノーベル (1833~1896) がダイナマイトを発明したのは1866年、無煙火薬は1888年であった。彼は晩年は主にイタリーのレモで過ごしたようである。なくなったのもレモである。ノーベル賞は1901年から始まっているから、今年は100年目と言うことになる。

ノルウェーと聞いて連想することは実は前記のヴァイキングやサーモンだけではないのである。ノーベルもそうだがここに記しておきたいのは次の3人である。

**イプセン**：人形の家を書いた、あのイプセンである。彼は1828年に生まれ、1850年から多数の戯曲を書いている。ペール・ギュントを書いたのは1867年であった。数行ではとても書き尽くせない多くの作品を、そして常に新しい表現に挑戦して、ペール・ギュントのような詩劇から中期の人形の家のような散文劇を経て晩年には象徴主義的、表現主義的な兆しにすら至るような探求を続け、1906年になくなっている。

ロイヤルパレスのある公園の近くに、イプセン・ミュージアムがあった。大きいとは言えないが、静かな展示室であった。

**グリーグ**：ペール・ギュントをはじめとして、たくさん (125) の歌曲、交響曲、協奏曲などを、北欧というイメージに相応しい美しいメロディーで書いた。

## ニュース

ある辞典は、彼のことをポーランドにおけるショパン、ハンガリーにおけるリスト、ボヘミアにおけるドボルザークにたとえている。1843年に生まれ、1907年に没した。イプセンは1874年にグリーグにペール・ギェントのための音楽を書くことを求め、1876年に完成して大成功を収めた。グリーグはこの作品によって政府から1600クローネの年金を与えられている。

ムンク：赤、黄、青、紫の交錯するバック、橋の上で耳を押さえ、口をあけて叫ぶ女性、「叫び」を書いた（彫った？）ムンク、彼は1863年に生まれ、1944年になくなった。

オスロの中心にあるナショナル・ギャラリーにはムンクの作品だけの部屋が2つ、作品は30点位。市の中心から地下鉄で3つ目位の駅から徒歩数分のところにムンク美術館がある。同じ主題の何枚かの間の移り変わりなどについて見る事ができたし、地下室のムンクの生涯やイプセンらとの交流などは、やはりここにこなければ見られない興味深いものだった。

話題をISOに戻す。日本がTC35のPメンバーになり、初めてTC35に出席したのは1987年だったから、満13年たったことになる。最初は様子もわからず、とにかく参加、といった状態だったし、初期のうちは出席者の交代が多くて批判を受けたこともあった。でもその後、国際委員を始め、関係者のご協力のおかげで今はかなり日本の努力と貢献を認識していただいていると思う。数年前と今ではJISとISOの関係はまるで違う。今後ISO活動をどう進めるべきか、今までのような追随、対応だけではなくて、日本の塗料業界としての戦略をじっくり議論すべき時になっているのではないだろうか、と考えるのである。

### 1. 定例理事会・評議員会開催

5月17日及び5月19日にそれぞれ定例理事会と評議員会が開催され、平成11年度の事業報告及び決算と平成12年度の事業計画及び予算が承認された。

### 2. ISO 国際会議で新しい塗膜の試験方法提案

第27回ISO/TC35国際会議が6月5日～9日オスロ（ノルウェー）で開催。当協会から吉田顧問を委員長として派遣、他に塗料メーカー、団体から5名が参加し、SC9を中心に活発な討議が行われた。

今回、日本からは、フクレ・ハガレ評価用のコンピューターグラフィクスによる画像、白亜化の新測定法、塗膜の傷つけ方法の違いによる腐食試験結果、化学発光について報告し、何れも高い評価を得た。

### 3. 2000年版試験料金表完成

当協会では、この6月に、従来の試験料金表(1997年版)にJIS K 5600に伴う項目の料金追加を主とした改訂版(2000年版)を発行致しました。

### 4. 住都公団向け塗料等の認定基準の変更

都市基盤整備公団より「機材の品質判定基準(建築編)」平成12年版が本年4月付けで発行されました。

本基準には、従来記載されていた試験を行う公的試験機関名や試験に適合した商品名(メーカー名)等の具体的な表示は削除されています。

しかし、新基準には、試験は公的試験機関で行うことが定められており、当検査協会はこの公的試験機関に含まれておりますので、従来通り当協会へ試験をご依頼下さいますようお願いいたします。

### 5. 日塗検ホームページ開設

当協会では、協会の業務内容・試験内容・保有機器案内・試験料金・頒布物・図書のご案内等から成るホームページを平成12年3月から開設いたしました。

(社)日本塗料工業会と相互リンク。

アドレス<http://www09.u-page.so-net.ne.jp/wb3/jpia/>

### 6. 引っかき硬度試験用鉛筆アメリカへ輸出

日本では引っかき硬度試験用鉛筆として三菱鉛筆(株)製(日本塗料検査協会検定)「MITSU-BISHI Uni」が広く使われています。日本以外では各国それぞれ一

般市販品を使っており品質の違い、バラツキが懸念されてきました。この度、GARDNER社(USA)から検定済みの「MITSU-BISHI Uni」を販売したい旨要望がありました承、早速第1回目の発注を受け輸出しました。今後世界中が同種の鉛筆を使うようになればと思っております。

## 7. 日塗検技術発表会開かる

6月23日東支部で第1回の日塗検技術発表会が開かれました。

テーマは下表の通りです。今後定期的を開催する予定にしております。

発表テーマ	発表者
微少押し込み硬度計によるコンクリート補修材の粘弾性の評価 —フィシャースコープH100による—	技術開発部顧問 岩井 弘
コンクリート補修材に於ける剥離試験方法の検討	技術開発部課長 山田 卓司
塗膜劣化の画像解析について(NEDO)	東支部検査部長 田原 芳雄
塗料の比重測定における不確かさの推定	東支部検査部第3課 清水 亮作
繊維強化ライニング材のひび割れ追従性試験について	西支部検査部次長 野原 哲雄
コンクリート補修材に於ける遮塩性試験方法の検討	西支部検査第1課長 奥野 博昭

## 8. 人事

### ・退職された人

- ①2月29日 中森紀夫 (東支部検査部第1課課長)
- ②3月31日 松永一恵
- ③3月31日 小林義和

### ・新しく入った人

- ①4月1日 橋本定明
- ②5月1日 中山 剛 (嘱託：技術開発部部長付課長)
- ③6月1日 大塚謙一 (大日本塗料より出向西支部駐在)

### ・人事異動 (課長以上)

(平成12年4月1日付)

- ①技術開発部 部付部長兼務  
高橋 威 (東支部支部長)
  - ②東支部検査部次長兼務 (昇格)  
村木 薫 (東支部検査部第3課長)
  - ③西支部検査部長 (昇格)  
加來 伸一 (西支部検査部次長)
  - ④西支部検査部次長 (昇格)  
野原 哲雄 (西支部検査部第2課長)
  - ⑤西支部検査部第1課長兼務  
奥野 博昭 (西支部検査部第3課長)
  - ⑥西支部検査部第2課長  
森園 正明 (西支部検査部第1課長)
  - ⑦技術開発部課長 (昇格)  
山田 卓司 (技術開発部課長代理)
  - ⑧東支部検査部第2課課長代理 (昇格)  
河村 マリ (東支部検査部第2課主任)
- (平成12年5月19日付)
- ①理事 (昇格)  
芝野 日出夫 (西支部支部長)